

# 夏秋ピーマン栽培におけるタバコガ類を対象とした防虫

## ネットの普及実態

○上島慧里子<sup>1)</sup>・山下大輔<sup>2)</sup>・姫野和洋<sup>1)</sup>・大坪亮介<sup>3)</sup>・岡崎真一郎<sup>1)</sup>  
(1 大分農林水研農業、2 農林水産部園芸振興室、3 大分豊肥振興局)

大分県は西日本でも有数の夏秋ピーマンの産地である。近年、県内ではタバコガ類の幼虫がピーマン果実の中に食入する被害が増加している（後藤ら, 2006）。また、タバコガ類は軟腐病菌を媒介する（山崎ら, 2010）ことから、市場病害も発生し、深刻な問題になっている。そのため、タバコガ類を対象とした防除対策が強く求められている。その対策として、タバコガ類成虫の施設内への侵入を抑制することを目的に、防虫ネットをハウスに展張する防除試験を行った。

まず、夏秋ピーマンにおけるタバコガ類の発生実態を把握するために、SEトラップによるタバコガとオオタバコガの発生消長を2011、2012年に調査した。県内ではタバコガだけでなくオオタバコガも発生していることが確認され、発生時期及び発生量には地域間及び年次間の差異が認められた。次に、防虫ネット（目合い6×2mm）におけるタバコガ類の侵入抑制効果を調べるために、タバコガ類の食害果及び腐敗果調査を2011、2012年に行った。2012年は、防虫ネットを展張していないハウスにおいて、場内圃場では食害果率が30%を超え、腐敗果率も約10%に達し、現地圃場においても食害果率が約10%を示したが、防虫ネットを展張したハウスではほとんど被害が認められなかった。

防虫ネット展張はタバコガ類による被害を防止する上で有効であることが判明したため、産地においても防虫ネットの導入が進められている。県内では間口6mハウス以外に3mや1.8mの簡易ハウスで栽培されており、ハウスの形状によって防虫ネットの展張方式が異なる。さらに、これまでの調査では防虫ネットの展張方式によってタバコガ類の侵入抑制効果に差異がないことも判明している。県内では防虫ネットの導入率が年々増加し、2012年には導入面積率が40%以上となった。今回は、県内におけるタバコガ類の発生実態をふまえて、産地における防虫ネットの取り組みの事例について紹介する。